筑波大学２

研究協力校（課程又は障害種）

・筑波大学附属聴覚特別支援学校（聴覚）

研究の成果

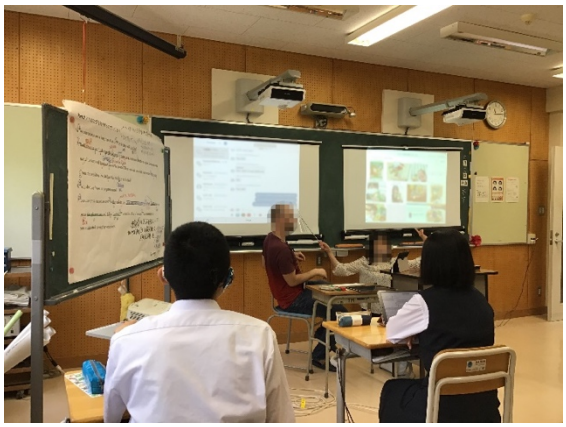
観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

1-1．　主体的対話的な深い学びに関する共通理解・合意形成

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、主体的対話的な深い学びに関して、特別支援教育に関する実践研究充実事業を始める前から取り組まれており、学校内での共通理解、合意形成が行われている。また、高等部の場合、一般の中学校やほかの聾学校から入学してくるため、入学前に教育相談を行い、保護者・本人・先生とで授業の様子の見学を行う。その際に、「主体的対話的で深い学び」を大事にしていることを説明し、共通理解を得ている。

1-2.　ネイティブ講師による対話の意識

高等部の英語の授業を行う際に、ネイティブ講師を招いていたが、継続的に授業に出てもらうことはこれまでになかった。実践研究充実事業を受託したことをきっかけに、ネイティブ講師にも事業展開の趣旨を理解してもらい、対話の中に入っていくような形で授業を講師にお願いしている（資料１）。



資料１　英語の授業の様子

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2.　個別の指導計画と評価

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、学年単位生徒数が多いため、グループでの学習を行っている（資料２）。しかし、その中でも子供ひとりひとりの目指すところはそれぞれ異なるため、個別の指導計画に沿って、それに対応した課題を出したり、個々を見て評価を行ったりしている。

３年間続けて行う英語のコミュニケーションに関する授業の実践研究については、継続的に子どもの変化をみることができる。そのため質問紙調査を行い生徒の変化を見ている。毎年、対象生徒に同じ内容の自己評価による質問紙調査を行い、対話を通して学ぶことに関して自分が肯定的に捉えているか、対話についての自分の態度が受け身か積極的かなどの調査が行われている。これらの調査は少なくとも年一回は行われており、自分の取組を意識させることにつながり、対話的な授業が苦手な生徒が苦手意識をなくしていく変化が見られている。

資料２　グループでの学習の様子

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3.　ICT 機器を用いた体育の授業

髪の毛や耳たぶ、えり元やそでロなどに身に付け、振動と光によって音の特徴を体で感じる補助装置を用いた授業を実施した。体育祭で実施しているマスゲーム(ダンス)では、音楽に合わせて体を動かすことが求められ、拍に合わせて動く必要がある。しかし、生徒の中には、動きの中でリズムをとるのが苦手な子どもたちが多い。そこで、補助装置を使用して生徒の動きのサポートを行い、円滑に授業が進められるような環境を作った。この補助装置は、一度使ってみて自分に必要だと思う生徒のみに使用させた。なかには、補聴器等により聴覚を使ってリズムを感じたり、周りの生徒に合わせて踊ったほうが良いと思う生徒もおり、結果として補助装置が必要だった生徒は 4, 5 人だった。この試みにより、音や振動を通して、自分たちに何が必要か主体的に判断させることができた。

また、体育ではボタンを押すと六箇所から光がでるという光刺激装置を開発し、それを用いた授業を行った（資料３）。体育の授業で動きの場面では指導者が声を出してもわからないことが多い。そのため生徒が良いプレーをしたら装置を光らせることで、生徒たちに今のプレーが良いプレーだったことを共有させることができた。これにより、装置が光ったプレー、光らなかったプレーについてグループで話し合う機会が増え、主体的対話的な深い学びへとつながった。

資料３　光刺激装置を用いた体育の授業

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4.　附属学校での交流活動

特別支援学校ではない附属の高校と高等部１、２年生が年に一度、交流活動をしている。障害のある生徒とない生徒がどのような工夫をすれば関わり合えるのかを学ぶ機会としている。また、大学で全附属学校から希望者が集まり共同生活を行っている。様々な障害がある生徒、障害のない生徒が一緒に活動をするためにはどんな工夫が必要なのかを体験しながら学ぶ機会としている。

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　外部からの評価

外部専門家による評価や助言に関して、平成 30 年度はカリキュラム開発が専門の千葉大学教授に授業を見てもらい、発話の適切性に関して評価や助言を受けている。次年度は別の専門の大学教授が評価、助言を行っている。また、障害に対する配慮としての ICT 機器の活用方法に関して、主に生徒の進学先である大学から生徒を通して、進学先の学校から直接、評価を受けている。

観点６：
新学習指導要領に対応した特色ある取組

6.　先導的な教育・研究

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、全国唯一の国立大学附属の聴覚特別支援学校高等部として、聴覚障害児の教育の実践に先導的に取り組んでいる。英語科でのネイティブ講師をはじめ、地域の専門家や社会で活躍する専門家をよび、カリキュラムに組み込んでいる。また、聴覚特別支援学校としては規模が大きい学校であるため、そのスケールメリットを使って大きなグループでの話し合いや活動が行われている。

ICT 機器の積極的な活用をしており、近年は、高等部普通科全生徒にタブレットを携帯させ、その授業内外での活用に取り組んでおり、タブレットの活用方法を聴覚障害児教育に関する研究会や講習会で積極的に発信している。